The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	伝聞マーカーとしてのラシイ ： 日本語教育の視点から
Author(s)	金谷, 由美子
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 44-63
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71147
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

伝聞マーカーとしてのラシイ－日本語教育の視点から－

金谷由美子

0. はじめに

本稿は、助動詞ラシイを、日本語教育において第一義的に「伝聞」を表す形式として導入することを提案するものである[i]。ラシイについては夥しい数の論文があるが、その多くは、ラシイの「推量」用法を認めた上で、ヨウダ等の他の認識的モダリティ形式とラシイを比較、整理することが議論の中心であった（寺村 1984、早津 1988、中畠 1990、田野村 1991、益岡・田窪 1992、三宅 1994・2006、菊地 2000、市川 2005、大場 2002、森田 2007、等）。しかしながら、談話におけるラシイは、発話の伝える情報が外部の情報源から得られたものであることを聞き手に伝達するメタ表示形式（本稿ではこの場合を「伝聞」と呼ぶ）へとほぼ移行しており、発話者の情報の真偽に対する判断を含む用法（本稿では「推量」と呼ぶ）は、談話では一部の出現形に使用範囲が縮小し、専ら書き言葉の「語り」で使用される用法になっているという実態がある。そこで、本稿では、書き言葉ではなく、TV ドラマシナリオ 20 篇を用いて話し言葉におけるラシイの実態を調査し、ラシイの出現形や前後に接続する（または共起する）形式を中心にラシイの用法を整理した。

本稿では次のことを議論する。第 1 節では、少なくとも談話においては、助動詞ラシイが外部の情報源の存在を聞き手に伝達する「伝聞」専用に傾き、「推量」のラシイは主として書き言葉における「語り」の様式として使用されていることを示す。第 2 節では、通時的研究の成果に触れ、ラシイの意味変化が、（ノ）ヨウダ／ミタイダや「様態」のソウダとの棲み分けにより進んだものであると思われることを紹介する。第 3 節では、他言語においては、「伝聞」は「引用」形式と重なりを持つことが多く、認識的モダリティ形式から連続的に「伝聞」形式が生まれることもある日本語の事情（例：終止形＋ソウダ）に沿ったラシイの説明が、学習者の誤用や非用を生んでいる実態があることを紹介する。第 4 節においては、TV ドラマシナリオの調査結果を用いて、出現形や前後に共起・接続する形式によって意味用法の使い分けが進行していることを論じる。①談話では「推量」用法が少ない。②活用語の終止形[ii]に接続する終止形[iii]の助動詞ラシイは、ほぼすべてが「伝聞」の形式として機能している。③「ラシインダ」「～ラシインデス」等の助動詞ラシイとノダ文が結合した形式は「伝聞」である。④助動詞ラシイに「デス」が続く「ラシイデス」も「伝聞」の形式として定着しつつある。⑤「～ラシイ（助動詞）+名詞句」の場合は、「語り」「談話」を問わず「推量」用法である。⑥連用形「ラシク（テ）（助動詞）」は現段階では、談話でも「推量」の余地を残す曖昧な形式である。⑦「ラシクナイ」「ラシカラヌ」は「そのものの本来の特徴をよく備えている」（『明鏡国語辞典』より）ことを意味する接辞用法（以下「典型」と呼ぶ）のみで現れる。⑧助動詞ラシイのタ形「ラシカッタ」は談話では

ほとんど用いられず「語り」専用である。第5節では、調査結果をラシイとヨウダとの棲み分けという観点からまとめる。なお、本稿は助動詞のラシイとされるものが対象ではあるが、「典型」を表す接辞ラシイも意味変化や使い分けの議論に関わる範囲で調査・議論の対象に含む。

1. 「推量」と「伝聞」

65 年前に公開された映画の台詞から、「推量」のラシイが対話で使用される場面を見られたい。1953 年公開の映画『君の名は』のある場面では、話し手が現場で直接的に得た聴覚情報に基づいて「推量」を述べるラシイが登場する[iv]。

(1)（春樹の下宿 2 階）春樹が間借りしている部屋で、真知子と綾が春樹の帰りを待っている。そこへ 1 階の玄関扉の開く音（玄関扉についている鈴の音）が聞こえてくる。

綾「(真知子に向かって）あ、帰ってきたらしいよ。」（綾、階段を下りる）

映画『君の名は』(1953）松竹

この場面を、映像と共に 10 代 2 名、20 代 2 名、30 代 1 名、40 代 3 名、50 代 1 名、70 代 1 名の計 10 名の日本語母語話に見せてどう感じるか尋ねてみたところ、7 人が即答でラシイが不自然であると答えた。その理由を尋ねると、「人から聞いた情報ではないから」という意見が複数返ってきた。(1）に対して適格性があると応えた場合（40 代 2 人）（70 代 1 人）でも、自分の家族の一員が帰宅する場面を思い浮かべてもらい、自動車が車庫に停まる物音で帰宅を察知したときに、別の家族に向かってなんというかという質問に置き換えると、「帰ってきたらしい（よ／ね)」とは言わないと言う。では、なんと言うのかと聞いてみると、言い切りの「あ、帰ってきた!」や、モダリティ形式を使用するのであれば、「帰ってきたみたい（だ／よ／ね）／んじゃない?」[v]等が考えられると言う。(1）のようなラシイは、古いフィクションの中では適格性があるように思われても、現実の談話においては使用されないようである。話し言葉におけるラシイのうち、(1）のように活用語の終止形につく終止形のラシイは、今日では人から聞いた情報であることを聞き手に伝える「伝聞」マーカーとして機能しており、(1）のような「推量」用法はほぼ廃れてしまっている。

本稿では、(1）のような「推量」のラシイが談話から消えつつあるにもかかわらず、記述にきちんと反映してこなかったことを多くの先行研究に共通する問題点と考える。先行研究で扱われている用例の多くが書き言葉に偏っていたことがその原因であろう[vi]。(1）には違和感を覚える人も、(2）のように“小説の地の文調”に変えてみると、「推量」用法のラシイの適格性が上がることが確認できた。

(2）そのとき玄関の扉が開く音がした。春樹が帰ってきたらしい。（作例）

（2）のような「語り」（小説の地の文、随筆、ナレーション[vii]）においては、動詞の終止形に接続する終止形のラシイが「推量」として未だ使用される一方、（1）のような談話においては不適格になるというのが、現時点でのラシイの実態であると考える。

このような話し言葉と書き言葉の違いは、書き言葉が話し言葉の変化を反映するようになるまで、両者の間に常にタイムラグが存在することから生じると説明できる[viii]。今後は、書き言葉においても「推量」用法のラシイが廃れていく可能性もあるだろう。

談話におけるラシイの「伝聞」への傾きについて、これまで言及がなかったわけではない。仁田（1992）は、「伝聞は基本的に〈聞き手存在発話〉である」とし、「伝聞」のラシイは対話文に現れやすく、非対話型の長い文連続の中でのラシイは「徴候の元での推し量り」になりやすいと指摘している。森山（1995）は、仁田（1992）における議論を「伝聞の対話性」と呼び、「対話」におけるラシイの「伝聞」用法について積極的に認めているが、「推量」と「伝聞」用法がどう区別されるのかについては、それ以上の精密化はなかった。この点について、三宅（1994）は、ラシイが対話的な文脈で「伝聞」になる傾向は認めながらも、対話的文脈でも「推量」になる用例があることから、「推論の現場性が満たされない」場合にラシイは「伝聞にずれ込む」とした。つまり、発話の現場で推論が行われていない場合に「伝聞」になるとしたのである[ix]。しかしながら、（1）でみたように、推論の現場性があっても今日の日本語では「推量」用法は不自然になる。では、談話の一部に残る「推量」のラシイはどのように説明されるべきであろうか。

本稿では、出現形に着目し、（1）のような談話における「活用語の終止形に後続する終止形ラシイ」は基本的に「伝聞」であると考える。その上で、この「伝聞」の意味が、「終止形＋ソウダ」のように完全に記号化されるところまでは至っていないため、「取り消し可能性」[x]があると考えた。言い換えると、文脈上「伝聞」であると聞き手が解釈することを阻害する情報があれば、「伝聞」ではなく「推量」として解釈されるということである。例えば、（3）にみられるように、「伝聞」と解釈するのが不自然な文脈的状況があれば、「伝聞」の“含み”[xi]を取り消すことができる。

（3）「私はどうやら、君を買いかぶっていたらしい。」　　『Liar Game』第 10 話

（3）は、「ラシイは文末について第三者の考えや気持ちや行動を伝えます。」（市川 2005）という説明から見ると逆説的ではあるが、このように話し手自らの心情について述べる場合、その情報が外部の情報源からのものとは考えにくいため、聞き手が存在する談話においても「推量」と解釈されるのである。

もうひとつは、命題内容に対する話し手の判断が含まれていることが言語化されている場合である。代表的なものは、（3）にもある「どうやら」、および「どうも」「なにやら」

である。これらの単語はラシイの「推量」としての解釈を促す場合が多い[xii]。このほか、「～のつもり（だった）ラシイ」の場合も、言及している対象の内面を話し手が推し量っていることがわかるため、文脈によっては「伝聞」が打ち消される場合がある[xiii]。

（4）刑事A：　「死亡推定時刻は4日前15日の夜9時から11時です。」
　元警察官僚：「この私にアリバイを聞いてるつもりらしいね。」　『相棒11』第4話

2.　通時的変化の観点からみたラシイ

活発な議論の発端となった論文で、寺村（1984）は、「ラシイは、その話し手の推量が、自らの主観的判断よりも他から得た情報に基づくものである可能性のほうが高いと言う印象を受けるのに対し、ヨウダは逆に自らの主観を前面に出す傾きがあるという違いがある」と両者を区別した。その後の研究も、立場の違いはあっても、判断の根拠がどのようなものかという観点を最重要視しているものが多く、多少の異なりはあっても、両者の違いを原点に立ち返って分析したという田野村（1991）の、ヨウダの本質は、「外見や印象を表すもの」であるのに対して、ラシイは「ある根拠に基づく事実の推定」であるという結論に収斂できるだろう。

しかしながら、鈴木（1988）・山本（2012）らの通時的研究の成果からは、ラシイもヨウダと同様、見た目などからわかる「様子」や「感じ」を表す用法（本稿ではこの用法を以下、「比況」と呼ぶ）が先に出現し、「推量」用法は後発であったことがわかっている。先行研究におけるラシイとヨウダの議論は、「比況」の用法が廃れた20世紀後半以降のラシイとヨウダの差異に限られたものであった。本稿はラシイの通時的変化について論じるものではないが、通時的研究の成果を踏まえ、ラシイから「比況」用法が消えたように、今また「推量」用法が廃れようとしているのではないかと考える。

山本（2012）は、助動詞ラシイの成立に古代語の「推量」の「ラシ」が関与したとする見方（此島1973）には懐疑的であり、中世室町期に成立した接辞ラシイ[xiv]が明治期にモダリティ形式へと変化した過程について論じている。山本（2012）によれば、近世以降、ラシイの接辞としての生産性が向上するのに伴い、前接するものが名詞や形容動詞語幹から名詞句や名詞節へと徐々に拡大し、活用語の終止形に接続するラシイも現れるようになった。明治中期以降、ラシイが活発に活用語の終止形に後接するようになるが、当時の「活用語＋ラシイ」の多くは、今日では見ない「事物や事態の様子・状態」を表す用法（本稿でいう「比況」）がほとんどであったと言う。

（5）寺への布施物、墓地の茶屋へ毎日の茶代、花料掃除料など、何かに付けて金には羽が生えたらしく飛び行く。　広津柳浪「狂言娘」（1985）（山本2012）

（5）は「羽が生えたように金が飛んでいく（＝金がなくなる）」という意味である。（6）（7）では、「名詞句+ラシイ」の形式で、今日のラシイの用法である「典型」の接辞でも「推量」の助動詞でもない「比況」の用例が見られる。また、出版年が昭和後期のものでも著者や翻訳者の生年代が古いものの中には、（8）（9）のように「比況」の用法が散見される。

（6）顔つきといい風姿といい、如何（どう）も姉妹（きょうだい）らしく見える。
二葉亭四迷（1887）『浮雲』（山本 2012）

（7）（蝶吉という芸妓は）「宜しい」と男らしく派手に爽にいった。
泉鏡花（1899）『湯島詣』（鈴木 1988）

（8）「（ルービン氏の）前歯のつきでた口もとは、いかにもビーバーそっくりで、そのうえ、実業家にはつきものの鼻ひげが、あっちむきこっちむき、ぴんぴんとおっ立っているため、ますますビーバーらしかった。」　ポール・ガリコ（亀山龍樹・他訳）（1982）『ハリスおばさんモスクワへ行く』（田野村 1991）

（9）怒鳴り込んで来たときの郁雄の顔には、子供らしい怒りしかなかった。
三島由紀夫（1956）『永すぎた春』（鈴木 1988）

明治初期・明治後期・大正期・昭和前期・昭和後期（昭和 20 年以降）の文学作品 20 篇を対象に用法別のラシイの消長を調査した鈴木（1988）によれば、（9）のような接辞ラシイの使用は、論文が書かれた 1988 年当時はもうほとんど見られなくなっていた。また、大正時代の接辞ラシイには、形容動詞語幹に接続して「様態」のソウダと競合する用法も見られたが、そのようなラシイの用法は昭和初期までで、昭和後期以降はソウダ一本に絞られた。（10）（11）は、同じ小説にソウダとラシイの両方が出現する用例である。

（10）a.再びウィスキの小さいコップを取り上げ、愉快らしく河合を名前で呼びかけた。
b.兄さんは珍しくあははと声を立てて愉快そうに笑いました。
夏目漱石（1912）『行人』（鈴木 1988）

（11）a.横着らしい笑（えみ）が目の底に潜んでいて
b.横着そうな微笑をたたえた新社主誉田男爵は
石坂洋次郎（1949）『青い山脈』（鈴木 1988）

これら今日では使わない「比況」や「様態」のラシイの用法は、明治後期から増え、大正期にピークを迎え、昭和前期に激減し、昭和後期には他の形式（ヨウダ、ソウダ、ッポイ）にその役割を完全に譲り渡した。こうして、ラシイの意味は、接辞では「典型」、助動詞では「推量」に限定されていったと鈴木（1988）はまとめている。さらに、本稿との関連で最も興味深いのは、鈴木（1988）において、新しい用法が小説の会話文で増えていく一方

で、今日消滅した用法が、減少しつつも小説の地の文では長らく使用されていたことが報告されていることである。このことは、今日のラシイが談話では「伝聞」に傾きながら、「語り」では「推量」用法を維持している状況と平行している。

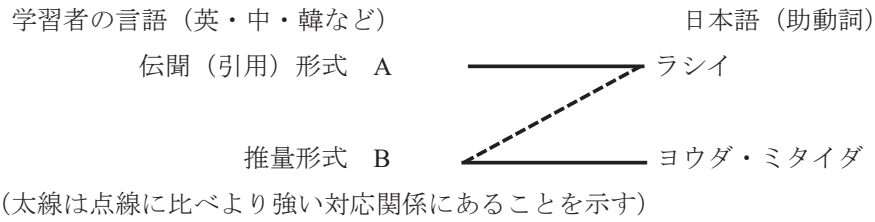
残念ながら、後発の「伝聞」用法の成立や使用の広がりに関する通時的な研究は管見の限りまだない。はっきりしているのは、ここ 100 年余りの間にラシイの意味用法が目まぐるしく変化したということである。この事実を踏まえ、本稿ではラシイの意味変化をもっと動的なものとして見る必要があると考える。

3. ラシイを「伝聞マーカー」として導入することの教育的意義

ラシイを「伝聞マーカー」として導入することを提案する意義は、第一には、ラシイの意味変化を教育に反映させることであるが、単に多義語の最高頻度の意味を明示するということに留まらない。ラシイが「状況からの判断を表す場合と伝聞を表す場合の両方にまたがった表現」(『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』より）であるというのは確かにそうではあるが、「比況」「様態」「推量」等の認識的モダリティを表す形式が意味変化を経て連続的に「伝聞」へと移行するという日本語独自の事情に沿った説明が混乱を引き起こしていると考えるからである。三宅（1994・2006）は、「伝聞」を一貫して認識的モダリティの下位分類である「実証的判断」に分類しているが、少なくとも教育的な観点からみたとき、「伝聞」と「推量」は、はっきりと区別されるべきであろう。

第 1 節で「伝聞」としての解釈を阻害する要素が文脈にあれば「推量」という解釈ができるとしたことからもわかるように、そもそも、外部の情報源による情報であることを示す「伝聞」と、話し手自らの考えが入り込む「推量」とは相互排他的である。小西（2011）の指摘にもあるように、教育現場においては、同様のメタ言語表示である「引用」形式と「伝聞」形式とを一括りにして整理すべきではないかと考える。

また、多くの学習者の母語では、文の命題内容が話し手の判断によるものなのか、外部の情報源によるものなのかを、異なる形式によって示している。例えば、現在日本語学習者の母語として多数を占める中国語・韓国語、及び学習者の共通言語である英語では、「伝聞・引用」であることを示す形式が、認識的モダリティ形式とは別に存在している[xv]。



（太線は点線に比べより強い対応関係にあることを示す）

図 1　学習者の言語と日本語の対応

このような状況で、情報源が外部にあることを示す用法に傾きつつあるラシイを、「推量」の助動詞であると教えることは、無用な混乱を招くだけではないだろうか。実際の誤用例を見られたい。（適格性判断は筆者による。韓・中は学習者の母語の意）

（12）（本人がいつ帰国する予定かと聞かれて）「*来年の 2 月に帰るらしいです。」（韓）
（13）「彼女はいつもきれいな服を着ていますね。*金持ちらしいですね。」（中）
（14）（友人から指導教授に関する感想を聞いて）「*先生は厳しいらしいですね。」（中）
（15）（教室の忘れ物の本を見て）「*山田さんの本らしいですね。」（韓）

辞書や教科書を見ると、助動詞のラシイにヨウダと同じ訳語が当てられていることが多い。韓国語ではヨウダよりもさらに守備範囲の広いモダリティ形式「같다 gatta」が使用され[xvi]、中国語ではヨウダの訳語にもなる「好像 haoxiang」が訳語[xvii]に当てられている。韓国語や中国語でも「推量」を表す形式は「断定」を避ける形式として用いられる傾向にあり、（12）は、恐らくそれをラシイで表そうとしたために生じた誤用だと思われる。「ラシイは話し言葉では通常その情報が伝聞であることを伝える」と教科書に書かれてあれば、談話において助動詞ラシイを「伝聞」以外で使用する誤用の多くを防止できるのではないだろうか[xviii]。

誤用だけでなく、非用も問題である。山森（2006）では、日本語母語話者と学習者にタスクを与え、認識的モダリティを表す複数の接辞について使用実態を比較調査した結果、どのタスクにおいても日本語母語話者に比べ学習者のミタイダ[xix]とラシイの使用頻度が低いことが明らかになった。山森（2006）の主張にもあるように、これまでの認識的モダリティ形式の記述が、これらの形式をいつどのように使えばいいのかという学習者の要求に応えてこなかったためではないかと思われる。

例えば、文を完成するタスクである（16）において、母語話者の 8 割強がラシイを用い、「伝聞」のソウダの使用が 1 割弱であるのに対して、学習者は 4 割が言い切りの形式を選び、3 割近くが「伝聞」のソウダを用い、ラシイの使用は 2 割にも達していなかった。

（16）A：「何でもこのトンネルは幽霊が（出る）よ。」
　　B：「えっ本当?」（山森 2006）

学習者が「伝聞」形式を選択する際に、ラシイよりもソウダを選択している率が高いことは、ラシイの「伝聞」用法がソウダに比べて学習者に浸透していないことを示唆している。小西（2011）は、伝聞のソウダが母語話者による「くだけた会話」では、ほとんど使用されないにもかかわらず、初級の段階で導入されていることを指摘している[xx]。これに対して、ラシイの「伝聞」用法は曖昧なまま放置されている実態があると考えられる。

4. シナリオによる調査

4.1 調査対象

本稿では談話におけるラシイの用法と出現形、前方共起と後方共起を調べるにあたり、1996 年～2017 年に日本国内で放送された TV ドラマ 20 篇を用いて検証を行った。調査対象としてシナリオを選択した理由を以下に述べる。①フィクションではあるが、小説の会話文と異なり、聞いて理解できることが前提である点で談話に近い。②小説よりも幅広い層の視聴者を対象としており、特に若年層が視聴者層として意識されているものが多いため、言葉の変化が反映されやすい。③言語化されていない状況的な文脈が比較的明瞭であることから、「伝聞」であるかどうかに関する判断がつきやすい。

他にも話し言葉コーパスとして、『ひまわり用：国会会議録パッケージ』のうち、第 145 回国会（1999 年）以降の衆・参両方の『予算委員会会議録』[xxi]と、『名大会話コーパス（中納言）』を使用した。しかしながら、これらの資料はシナリオに比べると文脈情報が不明瞭であることが多い。そのため、分析はシナリオ 20 篇（各タイトルの全話）を中心に行った。

4.2 「伝聞」の判定方法

助動詞ラシイを「伝聞」用法か「推量」用法かに分ける作業では、「伝聞」用法かどうかの見きわめが必要になる。本稿では、その情報が「伝聞」によって得られた情報かどうかではなく、「伝聞情報であることが聞き手に伝わる」ことを「伝聞」用法としているため、本来であれば、複数の母語話者による全サンプルの用法調査を行うべきであるが、広い文脈と併せた大量のサンプルを用いた調査の実施は難しい。そのため、定義と矛盾するようではあるが、間接的な証拠であるラシイ文で伝えられる内容が外部からの情報であるということを示す表現や状況を文脈上に見つけるという方法を取った。実際の用例で説明する。

（17）学園ドラマでの教師同士の会話：

「今日、中丸先生が職員会議で言ってたんですけど、２学期から新しいテキスト購入するらしいんですよ。」　『GTO』第 7 話

（18）パーティ会場で元同級生の女性 5 人が立ち話をしている場面：

（綾華）:「そういえば、私、いいこと聞いちゃった。タマちゃん結婚するんですって。」

（一同）:「えっ！」

（女 A）:「綾華は相変わらず、そういう情報早いな。」

（女 B）:「ねえねえ　相手は？」

（綾華）:「詳しくは分からないんだけど、年上で同じ業界の人らしいわよ。」

（一同）:「へえ～。」　『謎解きはディナーの後で』第 8 話

（19）音楽専攻の学生たちが集まっている場所で：

（A）「おーい！ おーい！ビッグニュース！今度、うちの学校にあのシュトレーゼマン

が来るんだってよ！」

（B）「うわぁー！シュトレーゼマンが来るらしいよ。」　『のだめカンタービレ』第 1 話

（20）婚姻届けを預かっているハルが、まだ役所に提出していないことを告げる場面：

（ハル）　「お預かりした婚姻届まだ出してないんです。」

（多実子）「…だと思ってました。代理の方が出すと通知が来るらしいんですけど来てないので。」　『恋愛時代』第 11 話

（21）地検支部内での会話：

（事務官）「さっき城西署から連絡がありました。元水泳選手の暴力団員だそうです。」

（一同）　「うーん。へえー。」

（検事）　「事件の夜に着ていたっていう赤いパーカは、泳ぎながら脱ぎ捨てたって言ってるらしいですよ。」　『HERO Ⅱ』第 6 話

①外部からの情報であることが前置きとして明示されている。

（17）（18）（19）（21）では、発話の冒頭で、「～が言ってたんですけど」「聞いちゃった」「ビッグニュース！」「連絡がありました」等、これから述べる情報が外部から得られたものであることが前置きとして言語化されている。

②「噂」「話」「情報」「ニュース」「連絡」等、情報源が言語化されている。

（17）「職員会議」、（18）「情報」、（19）「ビッグニュース」、（21）「城西署」等の単語が、情報源そのものを指すため、情報源が外部にあることが明確になる。

③命題内容から情報源の有無を判断できる場合がある。

（20）には、②で見たような言語化された情報源はないが、内容から見て、役所の「規則」で決まっていることだと常識的にわかるため、区役所職員のような外部の情報源や専門家から得た情報だということが明らかである。

④「言った」「聞いた」「って」「伝聞のソウダ」等、同じ情報に関して、他の引用・伝聞形式が文脈にある。また、ラシイの直前にも引用表現が接続する場合がある。

文脈に他の引用・伝聞形式が見られる（例：「～と言っている／た」「～とおっしゃっている／た」「～と言う」「～ふうに言う」「～と言われている」「～という噂（話）がある」）だけでなく、ラシイがそれらに後続しているものがある。この場合、文の構造は［［～と言っている］らしい］［［～という噂がある］らしい］ではあるが、結果的にラシイ文全体が外部の情報源を持つことが伝達される。（21）［［［泳ぎながら脱ぎ捨てた］って言ってる］らしい］は、容疑者が取り調べ中に言った［泳ぎながら脱ぎ捨てた］を署の刑事が聞き、地検に伝えたことを、さらに地検の別の職員に伝える構造になっているが、このような場

合、「言っている」という事実そのものに関して話し手が何らかの推測をして判断を述べているのではなく、全体が「伝聞」情報であることを示していると解釈できる。

⑤話し手が外部の情報源から情報を得たと聞き手が解釈したとわかる発話が存在する。

談話において聞き手側の情報を「～ラシイ（ね）」を使用して述べた場合、通常、聞き手は話し手が推測で述べているとは解釈せず、「誰に聞いたの？」「どうして知っているの？」「よく知ってるね」等の反応を示す。このような聞き手の反応からも「ラシイ」が外部の情報源からの情報を伝達していることを聞き手に伝える形式であることが確認できる。

（22）大物作家である秀月と出版社の社員の会話
（秀月）「ほれ、あの金融王子の本もえろう売れてるらしいし。」
（社員）「そんな事までご存じなんですか？」　『セカンドバージン』第 5 話

4.3　調査結果

1996 年から 2017 年までの約 20 年間の TV ドラマシナリオ 20 篇を対象にラシイの用法とその出現形、前方共起と後方共起を調べた結果を表 1 に示す。ラシイに後接する形式については、同一の表に入れると煩雑になるため、表 1 には含めなかった。

表 1　ラシイの前方共起と形態別意味用法

	助動詞						接辞	
用法（意味）⇒	伝聞			推量			典型	小計
ラシイ形態↓	終止形	名詞句	小計	終止形	名詞句	小計	名詞句	←前方共起
らしい（終止）	141	29	170	3	5	8	20	198
らしい（連体）	0	0	0	1	1	2	18	20
らしき	0	0	0	0	4	4	0	4
らしく（て）	28	0	28	5	2	7	10	45
らしくない	0	0	0	0	0	0	15	15
らしさ	0	0	0	0	0	0	5	5
らしかった	0	0	0	0	0	0	0	0
小計	169	29	198	9	12	21	68	287

219 件の助動詞ラシイと、接尾辞ラシイ 68 件の併せて計 287 件のラシイを収集した。なお、「いやらしい」「あほらしい」等の語彙は除外したが、「男らしい」「女らしい」のよう

に語彙的であっても「典型」の意味を持つものは接辞ラシイとして数えた。前方共起の「名詞句」には「形容動詞語幹」も含まれる。ラシイの形態については、「～ラシイから」等の「言いさし」や、「（ん）です」「んだ」が付くもの、終助詞がつくものも「終止形」とした。

以下、調査から明らかになったことを述べる。

①用法の出現に偏りがある。

20 篇のうち、10 篇では「推量」用法が皆無であった。それに対して、「伝聞」のラシイは、助動詞ラシイが 1 件しか出なかった一作品を除くすべての作品に見られた。助動詞 219 件のうち、「伝聞」と判定してよいと思われたものが 198 件で、90.4%にあたり、残り 21 件のうち、「推量」と判定できるものが 17 件、はっきり「伝聞」と判定できないもの 4 件（用例 29 等）があり、判定できない場合は「推量」として数えた。

②終止形に接続する終止形のラシイはほぼすべてが「伝聞」（97.9%）である。

終止形に接続し、かつ、ラシイ自体が終止形の 144 件（うち「推量」と判定したものが 3 件）は、97.9%が「伝聞」である。例えば、4.2 節で見た用例（17）（19）（20）（21）がこれにあたる。144 件中、「伝聞」ではない 3 例のうちひとつは、第 1 節で見た自らの心理状況について語る用例（3）である。残りの例外二つも挙げておく。

（23）金融庁の検査を目前に銀行の建物の設計図を見ている場面：
「総務が検査に必要のないバックヤードは記載しなかったらしい。」『半沢直樹』第 9 話
（24）「検察は恐ろしい連続通り魔をつくりあげたいらしいな。」『HERO Ⅱ』第 11 話

（23）は、設計図が情報源であり「伝聞」とは考えにくい。（24）の「～たいラシイ」は、（4）の「つもり」と似て、話題に上っている人物の本来は知りえない内面を推測していることがわかることから、「伝聞」用法としての解釈が阻害されると考える。

③「伝聞」「引用」形式と共起する形式で最も目立つのはノダ形式である。

聞き手にとって新しい情報を開示するときに使用される形式であるノダ文が「伝聞」情報の文脈によく現れる。後方共起では、（20）「通知が来るらしいんですけど」（17）「テキスト購入するらしいんですよ。」のように、ノダ文がラシイに接続した「ラシイん」の類が目立つ（42 件）。また、（18）「結婚するんですって」（19）「来るんだってよ」のように、同一の情報に関してノダ文と引用形式「ッテ」が合わさった「ンダッテ」「ンデスッテ」や、「伝聞」のソウダとノダ文が組み合わさった「ソウナンデス」が見られる。

（25）ピアニストが遅れていてリハーサルができない場面：

（司）　「若田さんの入りが遅れていて五重奏のリハーサルができないそうなんです。」
（真紀）「え･･･リハなしでやるんですか？」
（司）　「いえ、それは 若田さんも無理らしいんで･･･（言いにくそうにする）」
（真紀）「私達の出演は、なし？」
（司）　「プログラムは決まってるんで出るらしいです。」
（真紀）「じゃあ…?」
（すずめ）「音源流すんですって。私達、音源に合わせて演奏してるフリするんですって。」
『カルテット』第 5 話

④その他の後方共起　（ラシイヨ・ラシイデス等のチャンク）

ノダ文以外の後方に共起する形式について述べる。「伝聞」用法では、終助詞も「～ラシイよ」「～ラシイぞ／ぜ」のように聞き手が知らない情報を開示する形式が後続する場合が目立つ（57 件）。これらの形式は「推量」用法にはほとんど見られない。また、助動詞ラシイにデスが後接する「～ラシイです」（23 件）は、ほぼ「伝聞」用法であると言える。前方が名詞句の場合は、「典型」の接辞ラシイとの区別が問題になるが、68 件ある「典型」のラシイのうち、出現形が「ラシイです」のものは、（26）「桜川先生らしいですね」（『地味にスゴイ！』第 8 話）の 1 件だけだった。

前述③のノダ文と併せ、「～ラシインデス／ラシインダ」「～ラシイデス（～ラシイッス）」、加えて、「～ソウナンデス／ソウデス」「ンデスッテ／ンダッテ」がチャンクとして「伝聞」形式になりつつあるのではないかという感がある。

（27）ダンスが好きだという社長の噂話をしている場面：
「社長ダンスなんて踊れるの？」
「ええ、イギリスに留学してた時に夜な夜なダンスパーティーで踊ってたらしいです。」
『世界一難しい恋』第 6 話

（28）作曲家葛西の盗作問題について、弁護士に調査報告をする場面：
「葛西が自分で作ってないって話はわりと有名な話らしいっす。特にここ数年はほとんどゴーストだって。」　『リーガル・ハイ』第 2 話

「～ラシイッス」のうち、「伝聞」とは言い切れない用例が 1 件だけあったが、学生 C が学生 A の表情から気持ちを読み取って同席している友人 B に“伝聞した”と解釈することもできる。

（29）衆人環視の中、女子学生に抱きつかれた男子学生 A を友人 B、C がからかう場面：
（学生 A）「突然で避けられなかったんだよ。」

（友人 B）「避ける気あったのか？」
（学生 A）（表情）
（友人 C）「（友人 A の表情を見て）微妙らしいっすよ。」　　『オレンジデイズ』第 3 話

⑤「～ラシイ（助動詞）＋名詞句」は「伝聞」用法にはならず、「推量」用法である。

この用法に限っては、ラシイは「伝聞」ではなく「推量」であると言いきってよさそうである。今回のシナリオ調査でも、「～ラシイ（ラシキ）＋名詞句」に「伝聞」の用法は見当たらなかった。この現象は、中畠（1990）で指摘されているように、「～（の）ような＋名詞句」が「比況」としてしか解釈できないというヨウダの事情と関係が有りそうである。中畠（1990）では、(30)「元日本兵らしい男」(31)「ビルの屋上から撮ったらしい富士山の写真」等のラシイをヨウダと置き換え、(30’)「元日本兵のような男」(31’)「ビルの屋上から撮ったような富士山の写真」とすると、「推量」の意味はなくなり「比況」の意味しか出ないとされる。近代にはあったラシイの「比況」の意味が消え、「ラシイ+名詞句」は「推量」に、「（ノ）ヨウナ+名詞句」が「比況」という棲み分けが進んだと考えられる。

(32)「犯人らしき男を目撃しました。」『HERO Ⅱ』第 8 話
(33)「（だんなさまは）（愛人と）行きつけらしいホテルに消えられました。」
『家政婦のミタ』第 9 話

⑥「ラシク（テ）」の形式は、「伝聞」か「推量」かの区別が曖昧になる。

「推量」に分類した 21 件のうち、3 分の 1 に当たる 7 件がラシク（テ）の形式であった。

(34) 銀行員が、検査で見つかると不利になる資料を隠す話をしている場面：
「伊勢島（ホテル）のまずい資料らしくて疎開させてくれって」　　『半沢直樹』第 9 話

ここで、資料を「疎開させる」というのは、「安全なところに隠す」という意味である。「疎開させてくれ」と頼んだ人物が「これは見つかるとまずい資料である」と話し手に言ったかどうかまでは断言できない。後続文に引用形式の「って」があるものの、「疎開させてくれ」と言われたから「見つかるとまずい資料」だという推測したという可能性が残る。

(34) のラシクテの文を、それぞれ (34’) ではノダ文のラシインダに、(34”) では「終止形＋終止形ラシイ（です）」に変えてみると語感が変わるのを確認されたい。

(34’)「伊勢島のまずい資料らしいんだ。疎開させてくれって。」
(34”)「伊勢島の資料、金融庁にみつかるとまずいらしいです。疎開させてくれって。」

また、「ラシク（テ）」が「伝聞」の場合は、前方が名詞句の例は見つからず、すべて活用語の終止形であることが観察された。つまり、「伝聞」用法では、前方が名詞句の場合は（18）のようにラシイの形態が終止形となり、ラシク（テ）の場合は、（35）のように前方の活用形が終止形になる。この 2 点に関して調査したシナリオ内では例外がみつからなかった。「名詞句＋ラシク（テ）」は、「推量」と紛らわしくなるため頻度が低いと推測される。

（35）デート中に仕事の電話を取った後、会社に戻る事情を彼女に説明する場面：
「なんか、投票ページのスタイリストさんに顔見せしなきゃいけないんだって。さっきイタリアから帰国したばっかりらしくて。」　『地味にスゴイ！』第 5 話

⑦ラシイの否定形「ラシクナイ」「ラシカラヌ」は「典型」でのみ現れる。「ラシキ」は前項が名詞でも「典型」はなく、「推量」である。

助動詞ラシイとされるもののうち、前方共起が名詞句であるものは、助動詞ラシイ（「伝聞」29 件、「推量」12 件）が計 41 件、「典型」を表す接尾辞ラシイが 68 件で、合計 109 件とラシイ全体の 38.0%を占めるが、紛らわしい例はあまりない。意味的には、「典型」を表す前項は、68 件のうち 67.6%にあたる 46 件の名詞句が（36）（37）のような人名や「京都」のような固有名詞、「あなた」「あいつ」「君」「お前」「自分」等、特定の人を指すという特徴を持っている。また、同じ「人名＋ラシイ」でも、文脈から措定文なのか同定文なのかがはっきりしているため、「典型」の接辞か助動詞ラシイかについて、紛らわしさを感じる例はほとんどないと言ってよい（用例 36 と用例 38）。既に多くの先行研究で指摘されているように、ラシクナイ・ラシカラヌ等のラシイの否定形は助動詞ラシイの出現形にはないことも、「典型」が区別されやすい理由である（用例 37）。また、（39）のように「ラシキ」は、前項が名詞句でも「典型」の用法がないことを田野村（1991）が指摘している。

（36）「斬新じゃないけど森尾らしい。私じゃなくて森尾に考えさせたってことは森尾らしさを出せってことだからこの方向性で間違ってないと思うよ。これで進めて。」
（典型）『地味にスゴイ！』第 9 話
（37）「こんなの秋山さんらしくないですよ。」　（典型）『Liar Game』第 10 話
（38）「誰です！そんな暴力沙汰を起こした生徒は?」
「それが…特進の緒方英喜らしいんです。」　（伝聞）『ドラゴン桜』第 5 話
（39）「久保らしき人物の情報を得たと言うことなのです」　（推量）『HERO Ⅱ』第 6 話

紛らわしさがないとは言え、書き言葉においては、「典型」の接辞に「～より」「とても」「まったく～ない」等の程度性を表す語彙や、「典型」と相性のいい「いかにも」との共起を図ることにより、助動詞ラシイとの意味区別を明確にしている様子が『BCCWJ』の用例

から見て取れた。話し言葉では、田野村（1991）が指摘しているように、高低アクセントによる違いも解釈を助けるが、書き言葉ではそれができないためであろう。

⑧「ラシカッタ」は談話では使用が稀な「語り」専用の形式である。

調査したシナリオの範囲内では、「典型」を含むすべての用法においてラシカッタは 1 件もなかった。『国会会議録（衆／参予算委員会 1999 年～2012 年）』においても、助動詞のラシカッタは皆無である。『名大会話コーパス』でも語彙素ラシイで検索した 628 件中 2 件しか出てこないところを見ると、談話では使用頻度が低い形式と見ることができる。『BCCWJ』では、523 件のラシカッタが出てくるが、そのほとんどが小説の地の文である。

（40）テント村には、いつのまにか拾われてきた捨て猫たちの数が増えていたが、タツヤが“猫係”になって世話をしているらしかった。

北村年子（1997）『ホームレス襲撃事件』太郎次郎社（LBl3_00097）

（41）玄関で物音がした。来客らしかった。

大石英司（1998）『新世紀日米大戦』中央公論社（LBm9_00034）

（42）メールでは敬語を使うその丁寧さが恭子らしかった。

橘もも（2004）『夏は夜。』講談社（PB49_00608）

（40）は、小説の前後を読み込まなければ、「伝聞」なのか「推量」なのかが定かではない。（41）は用例（1）（2）と似た文脈における「推量」の「ラシイ」の使用である。（42）は「典型」の接辞ラシカッタであるが、これは『BCCWJ』のラシカッタの中では、実は少数派で、はっきり「典型」とわかるものは 523 件中 17 件しかなかった。小説などの書き言葉においては、ラシカッタもラシイ同様、主として「語り」における「推量」を述べる形式としての使用が目立つ。

以上、ラシイの出現形、ラシイの前後に接続する形式、共起表現の違いなどによって、意味用法の使い分けがあることを見た。

5. まとめ：ラシイとヨウダの棲み分け

本稿では、今日の話し言葉におけるラシイの意味用法をシナリオの用例を中心に調査し、整理した。表 2 は、今回の調査結果をもとに、ラシイとヨウダが意味用法において棲み分けをしていると見られる様子を整理したものである。濃い網掛けの部分が意味用法を担っている方であり、薄い網掛けの部分は、今後廃れていく可能性があると推測される部分である。助動詞ラシイは談話では連体修飾のとき以外は「伝聞」用法に傾き、「推量」用法は専ら「語り」において使われているという実態がある。この結果を踏まえ、日本語教育においてラシイを第一義的に「伝聞」形式として教えることを提案する。

「伝聞」用法のラシイの振る舞いは、次の点で「伝聞」のソウダに近い。①ラシイ自体に否定形が見られない。②タ形が稀である。③終止形にラシイが接続する場合に特に「伝聞」の意味が顕著である。反面、「伝聞」のソウダとは異なり、ラシイは名詞句にそのまま接続することが可能であり、丁寧体でなくても使いやすいことから、くだけた会話においてソウダに取って代わるだけの条件を兼ね備えていると言える。ここで、あらためて他の引用・伝聞形式とラシイの関係が問題となるが、これについては今後の課題としたい。

表 2　ラシイとヨウダを意味用法の棲み分けという観点から整理したもの[xxii]

用法	比況	典型（接辞）	伝聞	婉曲[xxiii]
用例	①（容貌が）ビーバー｛のようだった／らしかった｝。 ②（金が）羽が生えた｛ように／らしく｝飛んでいく。	①教師らしい格好をしてください。 ②のだめちゃんらしくがんばって。 ③授業らしい授業	①たまちゃん、結婚する｛らしいよ／ようだよ｝。 ②年上で同じ業界の人{らしいわ／のようだ}よ。	
ラシイ	○→×	○	○	×
（ノ）ヨウダ	○	×	×	○ 断定を避ける効果

用法（形態）	推量 1「談話」（終止形）	推量 2「語り」（終止形）	推量 3（連用形）	推量 4（連体形）
用例	（物音を聞いて） あ、帰ってきた｛ようだ／*らしい｝よ。	扉が開く音がした。春樹が帰ってきた｛らしい／らしかった／ようだ（った）｝。	あの子、どうも自分が迷惑かけてるって気がついた｛らしくて／ようで｝。	現場で犯人｛らしき（らしい）／*のような｝男を見たんです。
ラシイ	○→△→×	△	△「伝聞」「推量」の区別が曖昧	○ 「推量」の意味
ヨウダ	○	○	○	×「比況」の意味だけ

矢印→は通時的変化を意味する。（○適格性有り、△用法が縮小、×不適格）

【註】

[i] 既に実践でラシイを「伝聞」マーカーとして教えている先生方がいらっしゃることは承知のうえで敢えて提案するのは、記述研究の側では必ずしもそう考えておらず、伝聞マーカーとしてのラシイの実態が辞書や文法書に反映されていないと考えるからである。

[ii]「活用語の終止形＋ラシイ」を指すが、中には「～からラシイ」「～タばっかりラシイ」等の接続も存在する。これらも含めて「終止形」とする。

[iii] 厳密には終止形とは呼べないものも存在する。ノダ文等が後接する「～ラシイんです」「～ラシイんだ」や、「～ラシイじゃん」も終止形としてカウントしている。

[iv] 脚本の『君の名は』（『月刊シナリオ』2017 年 1 月号参照）には、この台詞はない。

[v] 実際には、10 人中 7 人は日常的に関西方言を話すため、「あ、帰ってきた｛で／わ｝。」「帰ってきたみたいや（で／わ）」「あ、帰ってきたんちゃう?」等も出た。

[vi] このほか、ラシイの用法が急速に変化したために、議論が盛んだった 20~30 年前と現在では用法に差がある可能性や、母語話者の生年に 10~30 年ほどの差がある場合でも、内省の結果にかなり差が出る可能性が、用例に対する研究者の適格性判断からも見て取れる。

[vii] 音声言語によるラシイであっても、独り言のような独白的な発話や、ドラマ等のナレーション部分は、聞き手に向かって言う対話ではないため、書き言葉のように「推量」用法が可能となる場合がある。（ナレーションの用例：「青春は戻らないらしい」ビタミン炭酸 MATCH の CM（2018）大塚食品 http://www.matchnews.com/）

[viii] 可能性として、「語り」と「談話」の間には、言語変化の反映の速度の違いだけでは説明できない違いが存在し得ることにも触れておく。よく知られている現象として、感情形容詞の人称制限が「語り」においては解かれるという金水（1989）の指摘がある。小説のナレーターが「三人称の全知の語り手」であれば、談話においては人称制限のある感情形容詞（例：「悲しい」）も、そのまま登場人物の感情描写に使用することができる。「三人称の全知の語り手」であれば、登場人物の心理に入っていけるからである。ラシイについても「談話」と「語り」では異なる制約を持ち得る可能性がある。対話では、話し手の伝える命題の情報源が外部なのか、話し手本人の判断によるものなのかは、重要なメタ情報であるが、小説のナレーターが「三人称の全知の語り手」であれば、そのようなメタ情報は不要である。但し、小説であっても読み手に語りかけるタイプの「一人称の語り手」や、書き言葉であっても手紙やメールなどの私信であれば、談話に近くなると考えらえる。

[ix] 三宅（2006）では、命題が真であるための証拠の存在を認識する「実証的判断」のバリエーションのうち、その認識にいたるまでの「探索過程」が極端に短いものが「伝聞」であると説明している。

[x]「取り消し可能性(cancellability)」は、語用論で、通常「あることを言うことによって通常生じる含意を阻止したり、撤回したりすることができるということ」（『語用論キーターム事典』より）を意味するが、ここで言う「取り消し可能性」は、推論により導き出される「含意」（例：ランチに誘われて「もう食べた」と答えた場合に解釈される「行かない」の意味）の取り消しという意味ではなく、ラシイの「伝聞」の意味自体が、「伝聞」のソウダ等に比べまだ完全に記号化されていないグレーゾーンにあり、文脈によっては打消しが可能であることを指す。このような状況を何と呼ぶかについて管見では適当なものが見つからないため、「取り消し可能性(cancellability)」という用語を援用した。

[xi] 推論による「含意」と区別するため「含み」という単語を使用する。

[xii]「推定（本稿では「推量」と呼ぶ）」の「らしい」の文では「どうやら」「どうも」が典型的な修飾語であるという指摘が田野村（1991）や三宅（2006）にある。

[xiii] （3）も（4）もやや芝居がかった台詞調ではあるが、『名大会話コーパス』にも（3）のような自分自身に対する推量の「あたしはどうやら～らしい」が 1 件見つかる。「～つもり」と共起するラシイの用例も 1 件見つかるが、この「～つもり（だった）ラシイ」は、

「伝聞」用法であり、必ずしも「推量」になるわけではないようである。

[xiv] 村上（1981）によれば、接尾辞ラシイの成立は、以下のように説明される。「名詞の非反復形を語基とし、それに、情態言の形成にかかわるラがつき、さらに、形容詞をつくる接尾辞シイがついた、名詞=ラ=シイから成立したと推定される。」（例：愛愛しく／愛らしく、ばけばけしい／ばけらしい）

[xv] 韓国語においては、日本語の「～って」や「～と言う」にあたる形式「～고 하다 go hada」とその縮約形や他の形式との融合形が引用兼伝聞形式であり、韓国語に存在する様々な「推量」形式の単独使用では命題内容が外部から得られた情報であることが伝わらない。これが、日本語の「伝聞」のソウダやラシイと大きく異なる点である。中国語や英語においても、「（誰々が）言った」という引用形式（～说 shuo、～said/told）や、あるいは、「（私は）聞いた／読んだ」「～によれば」という伝聞形式（听说 tingshuo ~，据说 jushuo ~，听传说 tingchuanshuo ~，看 kan～上 shang、According to ~, I’ve heard~, ~be said to~）があり、外部の情報源の存在を聞き手に伝える場合はこれらの伝聞・引用形式を用いることになる。

[xvi] 『홀로日本語文法』『会話가強해지는日本語文法』『Essence 日韓辞典』では、ラシイを第 1 義的に「推量」とし、「같다 gatta」「모양이다 moyang ida」等を翻訳に当てている。

[xvii] 例えば、中国で販売されている電子辞書に搭載されている『日汉大词典』では、ラシイに「似乎 sihu」「好像 haoxiang」等を翻訳として当てており、「伝聞」用法に関しては記述がない。中国語の翻訳は、同辞書のヨウダ（不確かな情報を述べるときの用法）の翻訳に使用される単語と重なっている。

[xviii] (13) のような誤用も、「典型」の接辞ラシイがきちんと習得されていないからというよりも、ラシイを「推量」または「比況」「様態」のつもりで使用するために引き起こされている可能性が高い。談話におけるラシイが「伝聞」であると説明することによって、ややこしい説明なしに、このような誤用を減らすことが期待できる。

[xix] ミタイダに関しては、長年ヨウダのくだけた口語表現であるとされ、記述研究だけでなく教育現場においてもヨウダの影に隠れてきたという背景がある。

[xx] 小西（2011）では、丁寧体での「伝聞」を表す形式「終止形＋そうです」が使えない「くだけた会話」においてソウダの使用頻度が低いことが指摘されている。代わりに使用されているのが、「って」等の引用表現や伝聞のラシイであると考えられる。

[xxi] 国立国語研究所によって公開されている『国会会議録』パッケージに収録されている『予算委員会会議録』（1947 年～2012 年が収録され、データ規模は討議部分 : 2.91 億字、全体 : 3.01 億字で、第 144 回までと第 145 回以降にデータが二分されている）のうち、第 145 回以降の衆参両議院の『予算委員会会議録』（1999 年～2012 年）を対象におこなった。予算委員会を選んだのは、服部（2011）で、文末でのコピュラ形式の選択やコピュラ後の終助詞の有無・種類の差異から、本会議より予算委員会のほうが通常の談話に近いことが指摘されているからである。

[xxii] なお、「例示」や「目的」のヨウニ等、ラシイとの使い分けが問題にならないものは除外した。談話ではミタイダの使用が広がって久しいがヨウダで代表させている。

[xxiii] ヨウダやミタイダが使用される場合でも、話し手の発話内容が外部から得た情報である場合もあるが、それが外部から得た情報であるということが聞き手に明確に伝達されず、従って、聞き手が伝聞情報であると解釈しないのであれば、「伝聞」とは呼ばない。

【参考文献】

市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』スリーエーネットワーク

Allot, Nicholas. *Key Terms in Pragmatics*, （2010）. Continuum. 今井邦彦（監訳）岡田聡宏・

井門亮・松崎由貴・古牧久典（訳）（2014）『語用論キータ－ム事典』研究社
大場美穂子（2002）「日本語の助動詞『ようだ』と『らしい』の違いについて」『マテシス・ウニウェルサリス』3（2）:pp.99-114.
菊地康人（2000）「『ようだ』と『らしい』－『そうだ』『だろう』との比較も含めて」『国語学』第 51 巻 1 号: pp.46-60.
金水敏（1989）「『報告』についての覚書」仁田義雄・益岡隆志（編）『日本語のモダリティ』くろしお出版、pp.121-129.
小西円（2011）「使用傾向を記述する－伝聞の「ソウダ」を例に－」森篤嗣・庵功雄（編）『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp.159-181、ひつじ書房
此島正年（1973）『国語助動詞の研究』桜楓社
鈴木英明（1988）「明治以降のラシイの変貌」『國語國文』57-3：pp.42-59.
田野村忠温（1991）「『らしい』と『ようだ』の意味の相違について」『言語学研究』10: pp.62-78.
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
中畠孝幸（1990）「不確かな判断―ラシイとヨウダ」『三重大学日本語学文学』1: pp.25-33.
仁田義雄（1992）「判断から発話・伝達へ－伝聞・婉曲の表現を中心に－」『日本語学』77：pp.1-13、仁田義雄（2009)『日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房に再録
服部匡（2011）「言語資料としての国会会議録の特徴（1）－本会議と委員会等との比較―」『同志社女子大学日本語日本文化』23: pp.39-49.
早津恵美子（1988）「『らしい』と『ようだ』」『日本語学』Vol.7-4: pp.46-61、明治書院
益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法―改定版―』くろしお出版
松岡弘（監修）庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
三宅知宏（1994）「認識的モダリティにおける実証的判断について」『國語國文』63-11: pp.20-34.
三宅知宏（2006）「『実証的判断』が表される諸形式」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎（編）『日本語文法の新地平 2』、pp.119-136、くろしお出版
村上昭子（1981）「接尾詞ラシイの成立」『国語学』124：pp.18-27.
森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版
森山卓郎（1995）「『伝聞』考」『京都教育大学国文学会誌』26: pp.25-36.
山森理恵（2006）「認識のモダリティの使用について：日本語学習者と日本語母語話者の使用の比較を通して」『東海大学紀要』26: pp.73-85.
山本佐和子(2012）「モダリティ形式『ラシイ』の成立」高山善行・青木博史・福田嘉一郎（編）『日本語文法史研究１』pp.165-188、ひつじ書房
서지환（2003）『会話가強해지는日本語文法』을지외국어

이학의（2009）『홀로日本語文法』Samji Books

【辞書類】

上海译文出版社（2002）『日汉大词典』（講談社『日本語大辞典』（1995）第 2 版の翻訳）

大修館書店（2011）『明鏡国語辞典』第 2 版

民衆書林（1997）『Essence 日韓辞典』第 1 版

【コーパス　用例】

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）：中納言』

国立国語研究所『名大会話コーパス：中納言』

国立国語研究所『ひまわり用「国会会議録」パッケージ』

【シナリオ等　用例】

大塚食品（2018）　http://www.matchnews.com/

柳井隆雄（1953）『君の名は』松竹映画

太田愛・金井寛・輿水泰弘・酒井雅秋・櫻井武晴・戸田山雅司・ハセベバクシンオー・古沢良太・徳永富彦（2012-2013）『相棒 11』テレビ朝日

池田奈津子（2015）『アルジャーノンに花束を』TBS

衛藤凜（2006）『のだめカンタービレ』フジテレビ

大石静（2010）『セカンドバージン』NHK

金子茂樹（2016）『世界一難しい恋』日本テレビ

北川悦吏子（1996）『ロングバケーション』フジテレビ

北川悦吏子（2004）『オレンジデイズ』TBS

黒岩 勉（2011）『謎解きはディナーの後で』フジテレビ

坂元裕二（2017）『カルテット』TBS

龍居由佳里・林誠人・黒岩勉・旺季志ずか（2012）『ストロベリーナイト』フジテレビ

中谷まゆみ・川崎いづみ（2016）『地味にスゴイ！校閲ガール・河野悦子』日本テレビ

秦建日子（2005）『ドラゴン桜』TBS

福田靖（2014）『HERO Ⅱ』フジテレビ

藤井清美（2015）『恋愛時代』日本テレビ

古沢良太（2012）『リーガル・ハイ』フジテレビ

古家和なお（2007）『LIAR GAME　1』フジテレビ

森下佳子（2011）『仁』TBS

八津弘幸（2013）『半沢直樹』TBS

遊川和彦（2011）『家政婦のミタ』日本テレビ

遊川和彦・菅良幸（1998）『GTO』関西テレビ・フジ系列